

ブログの表現スタイルについて

内山 和也

0. はじめに

社会学的・社会心理学の文脈では、以前から電子コミュニケーションが注目されているが、荻野（1996：10f.）も、電子メディアが言語行動を大きく変えると指摘し、「言語とコミュニケーションに関わる広い範囲を研究対象としてい」く必要性を説いている。かかる状況を踏まえて、例えば、田中（2001：98）は「近年登場してきた新しいメディアといえは、携帯電話とパソコンである。新しいメディアが登場すれば、そのメディアに則したルールや表現が出現してくる」とし、電子メールを考察の対照としている。本論では、最近急増しているブログと日本語のコンテンツとして定着度の高いウェブ日記とを表現の問題として考えてみたい。

1. ブログとweb日記の関係

ウェブには、「ウェブログweblog（blogと略される）」として知られるサイト形式が存在する。ウェブログは、「ネットサーフィン」でみつけた興味深いウェブコンテンツへの定期更新されるリンクリスト（フィルタ）のコミュニティとして、1997年頃に米国で発生したものといわれている¹。その発生を踏まえると、ウェブログは、批評や個人的な注釈・感想・評価をハイパーリンクとともに記した（部分を含む）コンテンツ（コメント付きチェックリスト）であり、ウェブ上に公開されたウェブ閲覧（ネットブラウジング）の日誌といえる。小野田ほか（1998）は、HTML文書を「固有情報量」と「リンク情報量」とによってタイプ分類するように提案しているが、その基準を用いれば、ウェブログはテキストやデータベースからなるページよりリンク情報量が多く、リンクリストや検索サイト（検索結果）より固有情報量が多いコンテンツであるといえる。

一方、日本語のウェブページでは、「web日記」や「オンライン日記」と呼ばれるコンテンツが発達しており、ときにウェブログと同じものとされる。これは、日記のような体裁を持ち、それ自体「～日記」と題されるものが多いことを特徴とする。web日記は、日本語のサイトで特徴的に占有率の多いものであるとされ（石井他2000：25f.）、背景として日記文学の伝統や生活綴り方や自分史などの戦後の生活記録運動（赤尾1999）などもとりあげられる。ウェブ上での日本人の行動は、発信源（ドメイン）に関わらず個人のアイデンティティを呈示するところにあり、一方、米国人は発信源を意識して呈示するアイデンティティ（のフォーカス）を選択する傾向があるという（野村他2001：230）。同じく石井他（2000：23）は、日本人は自己表出（主観的情報の呈示）に重点を置き、米国人は自己開示（客観的情報の呈示）に重点を置いていると論じている。日本人は、自由で多様なアクセスにさらされる公的なものと理解（し情報をコントロールしようとする）するよりも、「ホームページ」を私的私有物と意識する傾向が強いということだろう。

川上他（1998）によれば、web日記の2/3は他のweb日記へのリンクを持っている。山下（2001：22）は「他人のweb日記を読んで共感したり反発したりして、それをまた自分のWeb日記に書く、というのはごく自然な反応のしかたなのである」と述べているように、web日記は横のつながりがあり、コミュニティを形成している。このような日記の変容を、川浦（2001：35）は「語られる自己から語り合う自己へ」の自己表現の変化であると捉えている（web日記のコミュニティ形成に関しては永江1999に詳しい）。Kawaura et.al（1998）・山下他（2000a）・山下（2000）は、

¹ブログの歴史については、Blood（2000）および「ウェブログ事始め ～（[online]トップページwww.alt europe.co.jp/splash/ から閲覧可能）に詳しい。

日記というジャンルが、表現内容（事実か心情か）と指向性（自己指向か他者指向か）とによって、忘備録memoir・日誌journal・（狭義の）日記narrowly defined diary・公開日記open diaryの4タイプに分類できるとし、HP作者への質問紙調査などから、web日記についても同様の分類が可能であるとしている。当然、日記の分類は、日記であることの条件をどのように考えるかによって変化する（日記の分類には、オルポート1970：103や甲斐1982などがある）。ただ、「毎日の記録。個人的なものをいう」といった辞書的な定義が、「日記」の一般に理解されているところではなかろうか。そこで問題は、「個人的」であるということをもどのように考えるのかということになる。web日記は、他人の関与を拒むものではないが、私事を書くものと見られることが多い。

赤尾（2002）では、ウェブログの下位概念として「web日記」（日々の出来事や思いを綴る記録的で雑記的なもの）、「テキストサイト」（テキストとしての面白さを追求する娯楽的で読み物的なもの）、「ニュースサイト」（ニュースを中心としたWeb上のテキストを個人の興味関心にしたがって整理してコメントをつける）を立てている。実際に、米国でブログと呼ばれる（名乗っている）ものには、全く個人的な日記と思われるものから単なるリンクリストまで様々な種類のものがある。しかし、テキストサイトはおおむねweb日記より大きなリンク情報量を持っており、また、日本では日記サイトとニュースサイトとに積極的な関係はもたれていない²。日本語のウェブサイトの諸形式をウェブログと総称すべきかについては疑問がある。

「日記者人口はかつては急激に増加していたが、現在では頭打ちになった。そして誰もが自分のページにオプションとして掲示板やら日記を置くようになった。日記はwebコンテンツとしてはいろいろな詰め合わせの中のありきたりの要素として落ち着いた（永江2000）」ともいわれる。その一方、ブログは、有用なツールやサービスが提供されたことなどもあり³、2000年以降に米国で急進している。そもそもweb日記は、日記ならば他者の批判にさらされることもなく、何を書いても自由だという気分を生ぜしめる点で、多くの日記者を集めたといえる。他方、米国では、ブログはジャーナリスティックな行為であるという理解があるように思われる。ここでは、情報の送出にリスクの伴うことが当然の前提にされており、その上で、ブログがどうあるべきか考えられているようである。

日本にはもともと、「ニュースサイト（個人ニュースサイト）」というブログに近い形式がある。ニュースサイトは、ウェブ上のニュースをソースとするリンクとコメントのリストであり、日本（語）の個人ニュースサイト運営者の約2/3は、自分のサイトをウェブログ（ブログ）であると認識している⁴という。また、ニュースサイトより固有情報量の多い形式は「テキストサイト」と呼ばれてきた（ニュースサイトやweb日記を含めてテキストサイトとも総称される）。ブログは、米国の動向を受けて持ち込まれた語だが、特定の事情から一部では否定的な語感を持つことになった⁵。

本論では、それぞれのサイト形式の関係を図1のように理解したい（あくまでも考察の上で一般的に区別するものである）。

2. 話しことばの包摂

ブログとweb日記とは、それぞれにウェブ上の表現一般に見られる特徴を持つとともに、日付（日時）の記載と定期更新という共通の性格づけを受ける。小林

²ZDNN：アンカーデスク/2003年5月7日「ウェブログに見る日米個人サイトコミュニティ事情」

[online]www.zdnet.co.jp/news/0305/07/cjad_horikoshi.html

³概要は、HotWired Japan Matrix Vol,0029 005「blogを中心としたwebサービスの発展」

[online]www.hotwired.co.jp/matrix/0305/005/index.htmlなど。

⁴ASCII24 / インサイドストーリー 2002年11月11日「インターネットのあり方を変える？個人ニュースサイト“blog”を運営する人たち」[online]ascii24.com/news/inside/2002/11/11/639851-001.html

⁵概要は、HotWired Japan Matrix Vol,0029 004「日本におけるblogの過去・現在・未来」

[online]www.hotwired.co.jp/matrix/0305/004/index.htmlなど。

(2000:73)は、日記を「一日の出来事や経験をその日に、あるいは時間を経ずして書き記したものである。日々書かれることが原則であり、ある一定期間、継続的に書き続けられることが前提である。」と、時間的性質をもとに日記を規定しており、エヴァン・ウィリアムスは「日づけ順に頻繁に更新され、特定の記事やウェブサイトへのリンクを掲載している特定のフォーマット」「短い文章が時系列に掲載され、一番新しい情報が一番上に表示される」ことがブログの条件であると述べている⁶。もともとICT(情報通信技術)は、ローカルな標準時でなくリアルタイムを共有させるものであり(アタリ1986、ヴィリリオ1998など)、ウェブの表現がリアルタイムに制約されるのは自然である。永江(2000)は「日記というのはオンライン文書の宿命で、次々に書き換え書き足していくので、これが自然と日記になる。また、自己完結的で自閉的で没交渉的なかつての日記の方がむしろ異常なの」とコメントしている。また、実時間には、話しことばは書きことばより場面性が強く形式性が弱いことも関わりあう。そこでは、部分が(内的に)構造化されないため、時間軸に沿った直線的な把握が必要になる傾向がある。その結果、話しことばは時間軸に線的なものになっている。ICTは、それが依拠する時間の概念(瞬間性と持続性との併存)に応じて、時間を書き言葉の構造化の一般的手段とする。ただ、時間による構造化は、最新でないものの可視性を妨げるという弊害があるが、ブログ用のツールには、トップから辿らなくても外部からブログ内の特定の記事に直接リンクできるようにするためのpermalinks機能が用意されている。その点で、ブログは、話しことば的性質をうまく包摂した書きことばだといえる。

3. ジャンルの自己規定

ウェブへのアクセスはすべて記録され、監視されている。匿名というイメージとは逆に、私話的な場はない。他人の干渉を受けない小さなコミュニティをなすには、私話的状况を創出しなければならない。そのためにしばしばもちいられるのが、ジャンルの自己規定と個人的なスタイルである。ブログやweb日記には、自らをブログや日記と名乗るものが多い。米国で、しばしばブログが既存のジャーナリズムと比較されるのは、有力なブログの多くがプロのジャーナリストやそれに類する者の手によるという事情がある。その一方で、大半のブログはごく限られた読者しか有していない。それらは、情報を世界中に発信しようというより、内輪で楽しもうといった趣きを持つものである(リービー2002)。公的な側面を持ちながら私的でもあるという点で、既存のジャーナリズムとは本質的に異なるものであろう。特に、日本語のサイトでは、内容(コンテンツ)が私的なものまたは私的な興味に基づくものであると意識されることが多いようである。ブログであっても「このページはだらしなく管理されてます。」「ここは個人的なメモです。」「よく間違えていて、放置したりしているので要注意。」のように断り書きがされている場合も少なくない。これは、ブログの論争的な面(後述)を中和するもので、個人的スタイル(後述)も同じ点に関わっていると思われる。

ここで、ジャンルの自己規定は、書き手による受け手のふるい分けだが、ウェブブラウジングに必須の「検索」は、逆に、読み手による書き手のふるい分けといえる。三宅(1996:100f.)は、ウェブはパッシブなメディアという特徴を持つと指摘している。具体的にいうと、紙による書籍という商品形態では、書き手あるいは作り手は、読み手(購読者)を捜さなければならなかったが、ウェブでは、逆に読み手によって探してもらわなければならない。ウェブでのコミュニケーションは、書き手が受動的で読み手が能動的であることに特徴づけられる。また、三上(1999:336)は、流言に惑わされないためには、ウェブサイトの信頼度の評価と多数の情報源の参照が重要だとしている。これらの要求はともに常に検索サイトから始めることに導くものである。さらに付け加えれば、検索の対象はテキスト(文字列)なので、これはテキストとリンクのネットワークというハイテク本来

⁶HotWired Japan, Matrix Vol.0029, 001「インタビュー:blogと大手メディアは互いに補完しあう」
[online]www.hotwired.co.jp/matrix/0305/001/index.html

のイメージ（ネルソン1994）にも一致する。ウェブ検索では、リンクの質と量とが結果表示に反映される⁷ことなどから、自分のページを探してもらいやすくするには、広く認知されたサイトと（相互）リンクすることが役に立つ。その結果、ウェブでは横のつながり（コミュニティ）が重視されてゆく。また、表現の面では、特定の語句にポジティブフィードバックが働くように思われる。表現の内容はともかく、形式においてはキーワードとなりそうな語が頻用され、「みんなが使っていることば」はさらに良く使われるようになるだろう。さらに、検索エンジンが、形態素解析を行い語順などを評価する際には、語結合や文型にも同様のフィードバックが働くとするのが自然である。ギロー（1959：123f.）は、逸脱的に使用された語がテキストの文体を特徴づけるとして統計学の必要性を説くが、ウェブでは、語の使用および使用の環境、特にその一般的側面がテキストを特徴づけるといえよう⁸。木坂（1992：91f.）は、表現は明示的な伝達性の指向と個性的な表現性の指向との緊張関係の上に成り立つものであるとし、その相互性は文学表現で特に明らかだと述べているが、ウェブ上の電子テキストは、検索でヒットしやすい定型性と後述するスタイルの個別性との緊張の上に成り立っているといえることになる。

4. レトリックとおしゃべり

ブログの特異性は、書き手の声 が読み手に直接届くというところにあるわけではない。Sullivan（2002）は「読者は、威厳のある大げさなタイトルや大規模なスタッフにもかかわらず、ワシントン・ポストやナショナル・レビューをますます疑うようになっていく。読者は、そのカーテンの後に、誤りを犯しうる本質的に信頼できない記者や編集者がいることを知っているのだ。彼らは、読者の尊敬を得た孤独なブロガーより常に信頼できるわけではない」という。言語表現は、受け手が人間であれば、送り手は人間でなくとも良い（エーコ1980）が、ブログが表現の背後の実体的な書き手（表現における一人称）の想定に強く結びついている点に注目すべきだろう。

情報が情報であるには、読み取り可能であり、読み取りに際して評価を受けなければならない（アイゲン2001:16f.,20）。しかるべく言語表現は受信時に評価されねばならず、メディアにはフィルタが必要である。チョムスキー（1994：141）が言うように、メディアの読解から有効な情報を引き出しうるのは、そこに些かの正義があるという信頼に基づく。メディアのメッセージに少なくとも真なるものがあるという確信が必要であり、それは実体的な書き手の存在への人間的信頼に基づくのである。われわれが表現に実体的な書き手を想定する慣習は、意味ある情報を受け取るために必須であり、単なる情報の束からは何も学ばないし、それに対して批判的読解力を保持する必然性もないだろう。

「書物」の生産のプロセスは、一人称の複数性を前提としており、著者名やコピーライトにならぶ発行人・出版社・印刷所の名や、おおげさな謝辞（形式的には「私」から「彼」「彼女」「彼ら」へのことば）などによって表わされる。しかし、ブログでは、一人称の想定を強化するように書くことが重要なようである。電子化によって、編集・出版・著述などの分業は既に曖昧になっているが、すべてを一人でやっていると示してみせることは一人称の想定の強化に役立つ。あるいは、テレビのように、こぎれいに問題を解決しようと当たり障りのない決まり文句を並べるのではなく、むしろ感情的に反応し、時に罵倒したり、悪ふざけして見せることが、ひとりの人間の存在を強く意識させる。そこでは、公平や中立でないことに意味があり、我々は個人の不公平や偏向を気分や感受性の問題として容認しがちなのであ

⁷www.google.com/technology/および馬場(2001-2003)など参照

⁸検索結果に含まれるサイト（形式）の種類によって、キーワードの意味属性に関する知識を得る（Glasner2003）という方向も考えられる。また、フィッシャー（2001：292）は、ICTが言語に与える変化で最も明らかなのは、それに関する新語や表現だと述べているが、語句へのポジティブフィードバックは、サイト名に対しても働くようである（ASCII24/インサイドストーリー2002年10月18日「理想のウェブってどんなウェブ？ ネットの世界が求めているものは」[online]ascii24.com/news/inside/2002/10/18/639345-000.html）。

る。結局、紙に書くように推敲とともに技巧を重ねることで人間を垣間見せるのではなく、人格のイメージを端的に植えつけることが求められ、練り上げられたことはより同時代的な気分を盛り上げる振る舞いの方が価値がある。

ことばを行動として捉え、何を話すかよりもどのように話すかを問題にするという点では、説得の技術としての古典時代のレトリックに似ているといえるかもしれない。古典時代のレトリックが直接民主制と結びついていた（トドロフ1987：72）ように、ブログが民主主義の新しいツールになりうるのかといった議論も見られる。

その一方で、時事問題をとりあげるにせよ、それは単なる「おしゃべり」ではないかとも見える。紙のメディアでは、書くことは話すことよりもはるかに難しく、同時に、人は（大抵）用心深くなり、種々のチェックがはたらいた結果思慮深くみえるようになるものである。他方、われわれの話し言葉の大半は無益なおしゃべりである、「話す」ことと同じくらい簡単にウェブで行動できるのであれば、その大半もおしゃべりになるのが自然であろう。

そこで注目されるのが、電子テキスト全般に見いだすことのできる表記上の特徴である。この特徴的な表記を佐竹（2002：14）は、「情報の不完全さを補い、感情、感覚のスムーズな伝達をサポートする手段」だとしているが、岸本（2000）および山口（1999）は、文字ベースの電子メディアで対面的コミュニケーションを目指すときに必要になったものだと考えている。話しことばが空間と時間とに制約され書きことばより不自由である以上、特徴的な表記は不足を補いというよりも余剰を付加するものと考えべきであろう。それらは、手軽な（おしゃべり的な）表現法として話しことばの性質（談話体）をとりこむときに必要になるものである。また、岸本（2003）は、特徴的な表記には「大げさな表現方法で目立たせて、多数の人に読ませようとする」自己顕示と自己満足とが見られるとしている。しかし、それが読み手を惹きつけようとする工夫であることは認めても、特徴的な表記自体がアクセスを増大させるわけではない。電子掲示板や電子メールでの特徴的な表記の使用は、ことばが内容を伝えるものであれば形式は自由に操作してかまわない（形式は本質的に無用である）という理解によるものと思われる（拙論2002）が、他方、テキストが言語使用の一般的な面に特徴づけられるときに、テキストの個別性を高めようと表記を操作することは現実的な選択といえる。これは、内容を伝えるべく一定の読み手を確保しておくには形式の工夫が重要だという理解といえ、ともに内容（コンテンツ）こそが重要だという共通の理解の中に分化するものである。ブログやweb日記に見られる特徴的な表記は、検索されやすい一般性と読み手を惹きつける個別性とを両立させる工夫の一つだともいえる。ただ、web日記が一般に特徴的な表記に訴えるのに対して、認知度の高いブログは表記の変形に抑制的である。これは、先に述べたようにブログが公的かつ私的事であること、あるいは弁論かつおしゃべりであることを示すものといえる。

5．個人的スタイル

コミュニティの形成に求められる私話的状況の創出が、ジャンルの自己規定と個人的な表現スタイルとを両輪に成り立つものであると述べた。以下に、個人的な表現スタイルについて考えてみたい。

人格がもともと流動的で多面的なものであるとすると、それを容易に形にできるオンライン環境で、オフラインと異なったあるいは複数のペルソナを持つことは自然であるように思われる。ウェブは「ボイス・チェンジャーならぬパーソナリティ・チェンジャー」（室井他1992：36）という側面を持っている。ウェブ上では9割以上がハンドルを使い（半数以上は複数のハンドル）、2割が現実とは別の人格があると意識しているともいう（読売新聞オンラインニュース2002年3月18日付）。タークル（1996：10章）は、ウェブ上で複数の人格を使い分けるとき、自己は多重でありながら一貫しているという。多様性と一貫性の併存は、互いにコミュニケーションを行う複数の自己（の多様性）を意識することによってなされる。ハイパリンクと（ホーム）ページによるウェブの基本的な構成は、それ自体が多重性

と一貫性との併存のモデルであるため、複数の人格または人格の複数性の使い分けを促すと言える。

しばしば日本人の言語行動は場面に合わせてスタイルを使い分け、欧米人はスタイルの選択で場面をコントロールされると言われる。一方、受動的な書き手と能動的な読み手によるウェブで、スタイルの選択は人格の選択と受けとられることになる。場面に関与するのが専ら読み手であるとき、特定のスタイルは、そのスタイルに自然な書き手（の人格）を想定させる（拙論2002）からである。人格の想定と関連した表現項目に、役割語があげられる。金水（2003）は、特定の人物像と結びつけられた話体を役割語と呼んでいる。役割語は、主に会話文に現われる表現のステレオタイプで、標準語（基準となる書きことば）との偏差によって階層化された体系（＝ヴァーチャル日本語）をなすという。コッホ（1987：160）が「行動パターンにおける可変性の範囲を限定するものはすべてステレオタイプである。可能な行動型の減少には、個々のステレオタイプの弁別性がより高まるという過程が伴う。…記号行動における新発明はどんな形であるにせよ、既存の全表現範囲を新しい可能性のためのステレオタイプのセットに変化させるものである。」というように、書きことばは、話しことばを下位のステレオタイプとして取り込む。話しことばは、書きことばであることを侵犯しない限りで（つまり書きことばを標準として）ステレオタイプとして機能し、また新たなステレオタイプをつくりだしてゆく。また、ヴァーチャルリアリティは、しばしば偽物の現実や非日常のもう一つの現実と理解されるが、実際のところは、現実の中の安価な現実であるといえる。位相語がリアルなのに対して、役割語がヴァーチャルだとされることから、それが安価な現実であることが知られる。一方で、役割語が書きことばのスタイルとしてヴァーチャルであることは、話体が事実上の話しことばであり、話しことばがその一部として安価な書きことばであることを物語るものと考えべきだろう。音声は安価なメディアである反面、担いうる情報量や伝達の範囲、場面への依存や時間軸に沿った直線性など、使用に制約が多い。ウェブでの役割語の最も明確な現われのひとつは文末の形式であろう。「読者を意識した記述の部分」で常体から敬体へのスタイルシフトが観察されたという報告（山下2000：178）はあるものの、山下他（2000）、山下・藤波（2000）は、web日記のタイプおよびWEB日記作者の性別（本人が自称するもの）と文体（文末形式）との間に明確な関係は認められず、自由な文体（文末形式）が特徴であるとしている⁹。

6．リンクの質と量

最後に、表現におけるブログとweb日記との違いについて考えておく。すでに触れたように、個人ページにリンクを盛り込むことは、自己の多様な関心を一貫したものとして構成するという行為であり、ブログはそのことを端的にあらわしている。また、ブログが一定のリンク情報量と一定の固有情報量との関係からなる形式と理解できることはすでに述べたが、リンクは引用の行為であり、リンクへの言及は批評性を帯びることになる。web日記が非論争的であるのに対して、ブログは本質的に論争的である。web日記では、50%のweb日記作者が（無断で）内容の訂正や削除を行なったことがあるという（川上他1998）。それに対して、ウェブログで内容の訂正や削除はより慎重でなければならず（Boutin2002）、追加による訂正・追加による削除（見せ消ちや訂正記事の追加）を行なうなどしなければならないかもしれない。

web日記の表現内容を特徴づけるのは、その凡庸さ（赤尾2002）であり、平凡であることがリアリティと結びつく。コミュニティ内の他のweb日記への言及が、平凡な日常性に向けられているかぎり、その批評性は気の利いた合いの手（「ツッコミ」）と理解されるに留まるが、時事問題などへの感想に及ぶようになると、web日記からブログへの接近も生じる。ブログとweb日記との違いは、リンク情報量だ

⁹個人的なスタイルはあくまでも理解可能な範囲になければならない。理解不能なものを意図するのならば、そもそもウェブ上に公開する意味はない。

けでなく、リンクの性質にもよるといえるだろう。

浜田(1991:42 n7)は、テキスト間に潜在的に成立している関係の意味を体現するものが接続語であり、接続語に関係を規定する積極的な機能があるわけでないとしている。関係を作るのではなく、関係を確認するということは、クリックブルテキストではいっそう明らかである。URL文字列は関係を作るが、テキスト文字列は関係を様々な仕方で行き確認するといえるであろう。ここから、ジャンルの特質を考える前提として、リンクの形式を分類してみることに一定の意味があるように思われる。

分類：関係の指示
指示語(ここ これ こんな)
関係の表示
注釈(詳細 記事 ソース ネタ元 日本語版 PDF)
場所の指示
サイトの運営主体名・個人名・ハンドル(よしさんのとこ)
サイト名
場所の表示
URL
内容の指示
ページのタイトル(ヘッダ)・記事の見出し
サービスの内容(アドレス検索 ソフトウェア名)
本文の要約
商品名などの名前や商品などの説明
写真(画像の)タイトルや被写体の名前
内容の表示
本文の直接引用
行為の指示
依頼や要請(ここ押して こっちもみてね これ買ったら)
行為の表示
行為の結果(こんなのつくってみた よそに投げてやった)

7. おわりに

本発表では、ブログをリンク情報量と固有情報量との関係から規定したが、ブログは種々の二項的性質の併存によって特徴づけられるように思われる。それは、その表現においても同様である。表現一般における二項的性質の併存は、従来指摘されてきたものであるが、ブログはそのような表現を典型的に、かつ多くの情報源から大量に生み出すことで、表現研究の重要な対象になりうると思われる。本発表は、その基礎づけとなるものであろう。

参考文献・資料

- アイゲン,マンフレッド 2001 「二〇世紀の生物学のうち何が生き残るだろうか」,マーフィー&オニール(編)『生命とは何か これからの50年=未来の生命科学への指針』[1996] 培風社.
- 赤尾晃一 1999 個人の情報発信メディアとしてのWeb日記
[online]tokyo.cool.ne.jp/webdiary/keynote.htm .
- 赤尾晃一 2002 「ハイパージャーナリズムとしてのウェブログ」
[online]www.akaokoichi.net/sougou/weblog.pdf .
- アタリ,ジャック 1986 『時間の歴史』蔵持不三也訳 [1982,1983] 原書房.
- 石井健一・辻大介・橋元良明・森康俊・三上俊治 2000 「内容分析による個人ホームページの国際比較 自己開示・自己表出を中心に」,『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』14,pp.2-82.
- ヴィリリオ,ポール 1998 『電脳世界 最悪のシナリオへの対応』本間邦雄訳 [1996] 産業図書.
- 内山和也 2002 「現代口語体の表現スタイルについて」,『広島大学日本語教育研究』12,pp.83-90.
- エーコ,ウンベルト 1980 『記号論』池上嘉彦訳 岩波書店.
- 荻野綱男 1996 「電子メールの光と影」,『日本語学』15(12),pp.4-11 明治書院.
- 小野田浩平・土肥浩・石塚満 1998 「WWWハイパーリンクの意味による分類とノードリンク構造の提示」,第56回情報処理学会全国大会, No.1Z-03.

- オルポート,ゴードン・W. 1970 『心理科学における個人的記録の利用法』大場安則訳 [1941] 培風館.
- 甲斐睦朗 1982 「日記の文体」,宮地裕ほか(編)『文体史』講座日本語学 8,pp.68-88 明治書院.
- 川浦康至 2001 「メディアと自己表現」,川上善郎(編)『情報行動の社会心理学:送受する人間のこころと行動』21世紀の社会心理学第8巻,3章 北大路書房.
- 川上善郎・川浦康至・山下清美 1998 「サイバー空間における日記行動報告書」
[online]homepage2.nifty.com/rumor/nikki/nikki.html .
- 木坂基 1992 「日本語表現法 日本語表現法研究の構想」,奥田邦男(編)『日本語教育学』教職科学講座第25巻,pp.88-102 福村出版.
- 岸本千秋 2000 「インターネットの日記サイトにおける表記の特徴」,『武庫川女子大学文化研究所年報』12, p.1-pp.15.
- 岸本千秋 2003 「インターネットと日記」,日本語学22(5), pp.38-48 明治書院.
- ギロー,ピエール 1959 『文体論 ことばのスタイル』 [1954,1957] 佐藤信夫訳 白水社.
- 金水敏 2003 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店.
- コッホ,ワルター 1987 「演劇の生得的基礎 ドラマおよび関連文化的事象の記号発生について」(山田=ボヒネック頼子訳),日本記号学会(編)『文化のインターフェイス 境界・界面・越境』記号学研究 7,pp.149-183 東海大学出版会.
- 小林多寿子 2000 「自己のメディアとしての日記 近代日記の成立」,『現代のエスプリ』391,pp.73-83 至文堂.
- 佐竹秀雄 2002 「変容する『書く暮らし』」,日本語学21(12), pp.6-15 明治書院.
- タークル,シェリー 1996 『接続された心 インターネット時代のアイデンティティ』 [1995] 日暮雅通訳 早川書房.
- 田中ゆかり 2001 「携帯電話と電子メールの表現」,飛田良文ほか(編)『表現』現代日本語講座 2,pp.98-127 明治書院.
- チョムスキー,ノアム 1994 『アメリカが本当に望んでいること』 [1992] 益岡賢訳 現代企画室.
- デュフレンヌ,ミケル 1968 『言語と哲学』長谷川宏訳 [1963] せりか書房.
- トドロフ,ツヴェタン 1987 『象徴の理論』 [1977] 及川他訳 法政大学出版局.
- 永江孝規 1999 「インターネットにおける自発的コミュニティの形成、特にWeb日記に関して」,『尚美学園短期大学紀要』14, pp.59-80.
- 永江孝規 2000 「インターネットにおける自発的コミュニティの形成、特にWeb日記に関して」HTML版
[online]www.shobi-u.ac.jp/tnagae/pub/wdc/010409.html .
- ネルソン,テッド 1994 『リテラリーマシン ハイパーテキスト原論』ハイテクノロジー:コミュニケーションズ社訳 [1980,1992] アスキー.
- 野村早恵子・石田亨・正木幸子・横沢誠・篠原健 2001 「インターネットにおけるアイデンティティの国際比較」,『電子情報通信学会論文誌D-』84(2), pp.222-231.
- 馬場肇 2001-2003 「Googleの秘密 - PageRank 徹底解説」
[online]www.kusastro.kyoto-u.ac.jp/baba/wais/pagerank.html .
- 浜田麻里 1991 「『デハ』の機能 推論と接続語」,『阪大日本語研究』3,pp.25-44. 大阪大学文学部日本文学(言語系).
- フィッシャー,スティーヴン 2001 『ことばの歴史』鈴木訳 [1999] 研究社.
- 三上俊治 1999 「インターネットと流言」,佐藤達哉(編)『流言、うわさ、そして情報 うわさの研究集大成』pp.327-337 至文堂.
- 三宅なほみ 1996 「インターネットのリアリティ」(インタヴュー),『現代思想』24(4), pp.98-105 青土社.
- 室井尚・西垣通・吉岡洋・黒崎政男 1992 「ポストモダンの情報空間」(日本記号学会第11回大会ワークショップA),日本記号学会(編)『ポストモダンの記号論』(記号学研究12), pp.19-58 東海大学出版会.
- 山口英彦 2000 「電子コミュニティにおけるエモティコンの役割」平成11年度神戸大学卒業論文.
- 山下清美・川浦康至・川上善郎 2000 「WEB日記の内容と文体の特徴」,CmCC研究会第3回シンポジウム発表資料.
[online]kujira.psy.senshu-u.ac.jp/%7Eyamasita/works/CmCC3.pdf .
- 山下清美・藤原尚美 2000 「自伝的記憶としてのWEB日記 内容と文体の性差の検討」
[online]kujira.psy.senshu-u.ac.jp/%7Eyamasita/works/interaction2000.pdf .
- 山下清美 2000 「WEB日記は、日記であって日記でない」,『現代のエスプリ』391,pp.166-180 至文堂.
- 山下清美 2001 「サイバーコミュニティのツールとしての、Web日記と掲示板」,『生活協同組合研究』305, pp.20-25 生協総合研究所.

リービー,スティーブン 2002 「ブログ空間の愉快的な生活」Newsweek日本版2002年10月9日号.
Blood, Rebecca. 2000 "weblogs: a history and perspective"

[online]www.rebeccablood.net/essays/weblog_history.html .

Boutin,Paul. 2002 "Michael Moore Caught At Own Game?" Wired News Nov. 21, 2002 [online] .

Glasner, Joanna. 2003 "Search Results Clogged by Blogs",Wired News May. 16, 2003 [online].

Kawaura,Yasuyuki.,Y.Kawakami and K.Ymashita. 1998 "Keeping a diary in cyberspace", in Japanese Psychological research. 40(4), pp.234-245.

Sullivan, Andrew. 2002 "The Blogging Revolution Weblogs Are To Words What Napster Was To Music.",Wired Magazine May 2002 [online] .

「日記」の項,佐竹秀雄・三省堂編修所(編)『デイリーコンサイス国語辞典』(1991)三省堂.

図1：各サイト形式の相関

